



住所: 東京都中央区日本橋大伝馬町13-8  
メディカルプライム日本橋小伝馬町3階  
TEL: 03-3639-3110 FAX: 03-3639-3112

## 2021年12月 診療カレンダー

日	月	火	水	木	金	土
28	29	30	1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11 *11時まで
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29 *最終日	30	31	1

## 2022年1月 診療カレンダー

日	月	火	水	木	金	土
2	3	4	5 *診療開始	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31	1	2	3	4	5

一般外来	9:30-12:00	16:00-19:00
発熱外来	12:00-13:00	15:30-16:00

休診日 午後休診 18時最終受付



今年もお世話になりましたよいお年を



ホームページ  
院長ブログ公開中



**「今月の言葉」**  
「サンタクロースが煙突を伝って降りてくると考えている人は誤解しています。本当は、心を伝って降りてくるんです」  
ポール・エルスタック(ミュージシャン)

**お知らせ**  
-12/11(土) 診療時間 9時~11時 ※10時45分最終受付  
-12/29(水) 年内最終診療日  
-1/5(水) 診療開始

## 年賀状

師走に入り気ぜわしい年の瀬を過ごしておりますが、皆さんはいかがお過ごしでしょうか。年末の大仕事の一つといえぱなんといっても年賀状でしょう。メールやLINEの普及により、最近では年賀状はあまり出さなくなった方も多いと聞きますが、今回は年賀状のを中心にお話したいと思います。

私が小学生のころは、年賀状は親の年賀状をもらって、両親の名前の横に自分の名前を書き、印刷済みのあいさつ文の横に「今年もよろしく」と書き込んで友達に出すのが常でした。実家の年賀状はお年玉付きではなく、朱色の縁取りのハガキで、格調は高め？ではあったと思うのですが、面白味はありませんでした。友達からの年賀状の多くはお年玉つき、木版画やプリントごっこなどを使用して作られたオリジナリティあふれるカラフルなものだったので、自分の家の年賀状が渋く、子ども心にいささかひげめを感じたこともありました。

自分で年賀状を用意したのは大学生になってからでした。一人暮らしを始めて迎えた最初の年末は部活動(オーケストラ)の東京公演が近かったため、実家(柏市)へは帰省せず札幌で一人、年末年始を過ごしました。お年玉付き年賀はがきを買ってきて、意気揚々と書き始めたまではよかったのですが、宛先から自分の住所、本文まで全部を手書きするのは時間がかかり、正直ハードでした。「今年もよろしく」のあとのハガキの余白にイラストを描くような才能も持ち合わせていないため、一人一人のエピソードを交えて書いたり、大変な思いをして書き上げたことを思い出します。その年は年末恒例の紅白歌合戦も全く見る余裕がありませんでした。その時ほど年賀状印刷の威力を感じたことはありませんでした。

結婚して子供が生まれてからは毎年、写真入りで年賀状を作っています。はじめは自宅のパソコンのパワーポイントを使い、文字や写真を配置して作りました。

パワーポイント画面で年賀状が完成したあとには、インクジェットプリンターで印刷するのですが、印刷ミスで年賀状が足りなくなって追加のインクや年賀状を慌てて購入したことも一度や二度ではありませんでした。ここまで苦勞して印刷しても、できればはイマイチだったり、ガックリすることもしばしばでした。

ここ数年はネットで年賀状を注文しています。ネット注文はテンプレートもあり住所の管理もできます。何といても自宅のプリンターよりも印刷は断然綺麗です。注文して2, 3日後に手元に届く、この快適さは最高です。ネット注文で出来上がってきた年賀状をそのまま投函することもできますが、私はせっかくなので、相手を思い浮かべながらひとりひとりに手書きで一言メッセージを添えるようにしています。

「手書き」にはその人の気持ちや想いがあらわれます。たとえば、野口英世の母 シカさんの、「はやくきてくたされ はやくきてくたされ いしよのたのみてあります(早く帰ってきてください 早く帰ってきてください 一生のたのみであります)」という手紙を見たことがある方もいらっしゃると思います。文字をあまり知らなかったシカさんが、息子に会いたい一心で懸命につづった手紙は、大変に心を打つものです。今年の夏、岩手県花巻の宮沢賢治記念館へ行き、そこでは有名な「雨ニモマケズ」の手帳を見ることができました。童話作家・詩人としての宮沢賢治の活動を再認識しただけでなく、農学者として、また科学者・教育者としての一面を垣間見る宮沢賢治の手書きの原稿を沢山見ることに、確かに彼が実在し、生活していたことを実感したものです。

手書きに代わって電子化が進んだのは我々の医療分野でも同様です。私が医師になったころは電子カルテなど存在せず、カルテには毎日大量の文字や絵を書き込み、温度板などは色鉛筆を用いてカラフルなグラフなども作成していました。現在私のクリニックでは電子カルテを採用しており、作業効率という点では大変優れていますが、大学病院で毎日使っていた患者さまの厚ぼったいカルテを懐かしくおもうこともあります。

「手書き」といって、身内のことで恐縮ですが、子どもたちが小さいころ「パパとママへ」と書いてくれた「おてがみ」はそのかわいらしい文字と文章が愛らしく、今でも大事に肌身離さず持っています。

私はこの「手書き」の文化が、メールやLINEの台頭により衰退しつつあるなかで、逆に重要性を増してきているように感じています。印刷の文章が多いなかで、独特の味わいと温かみ持つ手書きの良さが人の心に伝わるのではないかと考えているからです。

年の瀬の忙しい時期ではありますが、今年は皆さまもぜひ一言メッセージを添えて年賀状を出されてみてはいかがでしょうか？

